

〔目的〕 家族関係が子どもの性格形成に与える影響について、「家族との接触度」という指標を中心にアプローチしていく。第1報では、接触の程度と性格との間の関係を指摘したが、本研究では接触度に大きな影響を与えていると考えられる家族形態の違いに注目し、三世代家族と核家族では、接触度をはじめとする子どもを取り巻く家族関係がどのように違っているのか、そしてそれが性格形成の上でどのような影響を与えているのかを明かにする。また、同じ三世代同居であっても、地域による差の有無について分析を行った。

〔方法〕 被験者は秋田県の町立小学校（1年～6年、計246名）及び神奈川県内の町立小学校（2年～6年、計161名）の児童である。調査の内容は、1)性格に関する項目、2)孤独感に関する項目、3)家族に対する親和感に関する項目、4)家族関係の接触度に関する項目、そして5)家族に対する接触希望に関する項目から構成されている。なお調査は1991年11月～12月にかけて、担任の先生を通して各教室において実施された。

〔結果〕 家族形態別の比較から 1)接触度（三世代家族＞核家族）、2)性格特性—順応的成就欲求（三世代家族＞核家族）という結果が得られた。接触度に関しては、三世代家族において祖父母が対応している部分は核家族では両親（母親）や欠損（いない）につながっていた。また、同じ三世代家族でも神奈川の場合、接触の相手として両親が選ばれる場面が秋田より多いという傾向が示され、接触度及び接触希望度は地域による差もあるということがわかった。なお、全体傾向として、接触度・親和度・接触希望度との間には相関関係が認められ、これらの要因が密接に関連していることもわかった。